

研究を振り返って

山本 暉久

はじめに

考古学を志して大学に入ったのは、昭和40(1965)年4月の18歳の時であった。間もなく研究歴も半世紀になろうとしている。こつこつと諦めずに研究を重ねてきた、その根底にはやはり考古学という学問の魅力に取り憑かれ続けたことがあるように思う。考古学は野外で遺跡を発掘調査することが、その研究の基本にあるが、遺跡を発掘調査するという魅力、ワクワクする感覚は今も変わらない。本学の教員となってからも、ここ9年続けて山梨県での遺跡発掘調査に学生たちと出かけている。定年まであとわずかになってしまったが、調査はこれからも継続する予定でいる。

ここでは、私の考古学に対する研究の歩みを振り返りつつ、どのような研究戦略のもと何を研究し、これからも研究を続けていきたいのか、筆がおもむくままに書き留めてみたいと思う。

考古学への憧れと大学への進学

考古学を志した動機は人さまざまであろう。ハインリッヒ・シュリーマンのトロヤの発掘やハワード・カーターのエジプトのツタンカーメン王墓の発掘などの、宝探的な冒険譚に接して、考古学に憧れた人も多いただろう。私も中学・高校時代には、そのような書物を図書館で読みあさっていた一人でもあった。もともと、歴史に興味があったので、史学科に進もうとは思っていたが、とにかく大学に入るための受験勉強が優先で、団塊の世代にとっては受験戦争に勝ち抜くことが大きな目標だった。そんな中、高校2年生の秋、池袋の西武デパートで開催されていた「日本のあけぼの展」という展覧会を見学する機会があった。それは、日本列島の旧石器時代から縄文時代の最新の成果を展示したものであったが、それまでは考古学に興味はあったものの、くわしいことは何も知らないままだったので、とにかく驚きとともに大変感動し、よし、大学では考古学を

学ぼうと決意することとなった。今は、本学もそうだが、さまざまな入試形態があり、何度も受験のチャンスはあるが、そのころは、一発勝負の世界で、一度しかチャンスはなく、それも学部単位、学科単位で入試があり、合格点が決められ、それをクリアしないとアウトという厳しさであった。しかも、団塊の世代は受験者も多く、その競争に勝たなければならなかったのである。

さいわいというか、合格点ぎりぎり、早稲田大学第一文学部史学科國史専修に合格することができた。この國史専修という名前のいかめしい学科は古代史から近現代史を学ぶ学科で、考古学は、その当時、私の師匠となる櫻井清彦先生(早稲田大学教授を経て本学教授として退職)が細々と考古学の科目を開設していた程度であったが、専門分野の北海道・東北地方での調査や東京近郊での遺跡調査も行って、入学と同時に遺跡発掘に参加する機会を得ることができた。また、全学的なサークルであった考古学研究会にも入って、多くの考古学を学ぼうとする仲間たちや先輩に接することとなった。

この大学時代は、入学とともに学費値上げの反対闘争や、その後の学生たちの反安保闘争など、大学紛争が全国的な広がりを見せて、まともな授業ができない状況でもあったが、1年生から各地の遺跡調査に授業の合間をぬって参加し続けることとなった。この大学時代の体験が、その後の研究の基礎となったように思う。

研究の転機

そうした中、大学2年生の冬、昭和42(1967)年2月、その後の自分の研究の方向性を決定づけた遺跡の調査に携わることとなった。それは、横浜市洋光台猿田遺跡の発掘調査であった。当時の日本住宅公団が建設する洋光台団地の造成工事に伴って櫻井清彦先生が調査団長となって行われた調査であった。縄文時代中期の小規模な集落跡であったが、遺跡近くの建設会社のプレハブを借用して、自炊し

ながらの泊まり込みの発掘であった。この遺跡の調査は大学の調査としては珍しく、2カ月弱の調査期間をかけて遺跡のほぼ全域を調査するものであった。私はこの調査で、第10号住居址とした竪穴住居址の調査を担当することとなった。調査はほぼ単独で行ったもので、発掘された竪穴住居址は、後に櫻井清彦先生によって名付けられることとなった「柄鏡形住居址」であった（写真参照）。この住居は、出入口部が柄状に突出するもので、こうした構造は、住居に石を敷いた「敷石住居址」にしばしば認められることがそれまで知られていたが、この住居址の発見によって、石を床に敷かない「柄鏡形住居」が存在することが明らかとなった。なんでも、初めての発見というもの感動するので、この住居址の調査によって、その後の私の研究の方向性が定まることとなった。

ただ、その研究は就職した後に取り組むことになったもので、学部卒業論文は、「縄文文化形成過程の研究」という、縄文文化の成立の問題を扱ったものであった。実は、このテーマはすでに3年生の夏前に決めており、それから、関連する資料（考古遺物）を各地に見学する旅に出ることになった。3年生の秋には、九州各地と瀬戸内・近畿地方の資料見学旅行、4年生になって、北海道・東北地方の資料見학을2回に分けて行った。リュックサックに一眼レフカメラをぶら下げた旅、お金もないので、各地のユースホステルや、資料見学先の先生宅にご好意で泊まらせていただいたりしながらの楽しい旅行でもあった。その資料見学旅行の成果をもとに、3年生の秋から卒業論文の執筆に取りかかり、400字詰めの原稿用紙で約1000枚、製本したものが全7分冊、B4判の台紙に貼った図表や撮影した遺物写真を暗室で焼き付けて貼った図版編が箱で3箱となる大部な卒業論文となった。もちろんワープロやパソコンなどない時代だからすべては手書きだったし、そんな分量なので、大学へは一度に運ばず、何度かに分けて運び込むことになった。審査した恩師の櫻井先生には迷惑なことになってしまったが、今思うと、そこまでするかという気になるけれど、その当時は、大学時代の研究の集大成となるようなものをまとめたいという気概があったように思う。考古学を学ぶ今どきの学生たちは、実際に資料（考古遺物や遺跡）に当たることなく卒業論文をまとめている者が多いが、それではやはり駄目なのである。

さて、当然、卒業後は大学院に進学して研究を深めよう



昭和42（1967）年3月、横浜市洋光台猿田遺跡第10号住居址
初めて発見された敷石をもたない柄鏡形住居址

ということになり、早稲田大学へ進学するのではなく、某大学の修士課程を受験したが、2カ国語あった語学試験ができず不合格となり、仕方なく1年間、浪人しながら、語学の受験勉強をして、翌年再チャレンジしたけれど、これもまた不合格、結局、早稲田大学の修士課程に1年遅れで進学することとなった。大学院はその当時、考古学を専攻する学生は、日本史学科への進学が認められず、仕方なく、文学研究科芸術学専攻（東洋美術史）に間借りして席を置くこととなった。そのようにやや回り道をして母校の大学院に進学することにしたが、結果的にはそれが良かったように思う。

大学院での研究は、学部時代のテーマを発展させることにあったが、たまたま、修士課程2年秋の昭和46（1971）年、エジプト、ルクソール西岸にあるマルカタ遺跡の発掘調査に参加することとなった。以後今日まで続く早稲田大学のエジプトでの初めての発掘調査であった。エジプト考古学を専攻しているわけではなかったけれど、これまでの国内での調査経験と技術が買われて調査団のメンバーに加わることになったものである。翌年の4月初めまでの約半年間のエジプトでの調査と生活は今も忘れがたい経験となっている。

帰国後は、修士課程を1年間留年して、修士論文に取り組んだ。テーマは、「列島における初原文化の研究－回転押捺文系土器群の展開に関する一考察－」と題するものであった。ただ、心残りというか残念なことであったが、学部・大学院時代に研究した成果を論文として発表すること

ができなかった。その理由は、遺物を扱い論ずる場合、手元にある実物資料（該当する考古遺物）をもとに論じないと、説得力の乏しいものになってしまうと感じたからであった。こうして、昭和48（1973）年3月修士課程を3年かけて修了することとなった。

就職と研究の方向性が定まる

大学院修了の3月初めまで、まだその後の進路が定まっていなかった。博士課程へ進学することも考えてはいたが、専攻課程がないのがネックであることや、26歳にもなったので、そろそろ就職しなければなどと思っていたのだけれど、では就職活動は、となると全くやっておらず、一般就職も考えていなかったのでも、どうしようかと思っていたところ、たまたま、神奈川県教育委員会で、文化財、とくに埋蔵文化財の専門職を特別採用するという話が舞い込み、受験したところ、さいわい合格した。それがわかったのが3月28日で、4月1日に採用という慌たじさであった。このころ、各地方自治体は、急増する開発事業に伴い、遺跡を調査し記録を残す必要に迫られ、特別試験を実施して、大学・大学院で考古学を専攻し、遺跡の発掘調査の経験豊富な者を採用する動きが急ピッチであった。そのようなタイミングから、神奈川県地方公務員として採用され、教育委員会、事務局は神奈川県教育庁の文化財保護課に配属され、埋蔵文化財の保護行政事務と遺跡の発掘調査の担当、発掘後の出土品整理・報告書作成業務に当たることとなった。それまでは、全国各地、といっても北は青森県、西は京都府までだったが発掘調査を行ってきて、経験的には不足はないものと自負していたが、以後退職まで、神奈川県内の遺跡の調査や埋蔵文化財保護行政に当たることとなった。就職も決まり、生活も安定することとなったので、その年の9月、かねてよりつきあっていた今の妻と結婚した。

さて、そのような生活の変化の中で、では考古学の研究はどのような方向性を目指すのかといったことを考えたとき、学部・大学院時代の研究の延長線では発展がないこと、自分としては、モノ（考古遺物）にこだわって研究するのではなく、研究対象としてきた縄文時代文化の歴史を明らかにさせよう、そのためには、これまで研究の蓄積が多く、資料が豊富な、縄文時代中期文化を対象として研究を進めよう、その取っ掛かりとして、学生時代に調査した柄鏡形

住居址・敷石住居址について研究しようと決意した。だが、それまで、その方面の研究の蓄積もほとんどなく、1年間、関連する文献目録を作成しつつ、コピーや原本の論文・調査報告書の収集を行いながら読破していくこととなった。そのために、仕事をしながら研究の時間を確保するために、それまでの夜型の生活から、朝5時に起きて、机に向かう朝型に転換することにした。出勤前のわずかな時間を利用して研究するという進み具合は遅々としたものであっても、年間毎日1時間勉強したなら、最終的には365時間になるのだから、長期スパンで研究を続けようと思ったのである。研究職に就いたわけでもなく、また、誰に強制されているわけでもないのでも、気楽な気持ちであった。朝型勉強の利点はなんといっても邪魔の入らない静かな環境にあるということだろうか。

そのころ、作成した関連する文献目録は、カード式に整理したもので、もうパソコン・インターネット時代には過去の遺物と化してしまっただけで、今も押し入れの中にその成果は保存されている。

そうした研究の方向性を定めることとは別に、職場の同僚たちと研究を研鑽しあうことを目的として昭和51（1976）年4月、「神奈川考古同人会」を立ち上げて、雑誌「神奈川考古」を創刊した。考古学の論文を自由に出来、不出来は問わないで載せることができる雑誌として、現在まで刊行し続けて、その数は49号にまでなった。今も、その創刊当時の伝統が生き続けている。

初論文の発表とその論争、シンポジウムの開催

今でも、若いころの研究に対するエネルギーはすごいと思う。生活を朝型に切り替えてこつこつと研究を重ねて、初めての論文を昭和49（1974）年12月に書き上げることができた。「敷石住居出現のもつ意味」と題するこの論文は当時発見され始めた敷石住居址の出現期の事例を集めながら論じたものであった。この論文は、京都の平安博物館に事務局があった古代学協会が毎月刊行していた「古代文化」に投稿することにした。それは、当時平安博物館に勤めていた渡辺誠先生（後に名古屋大学教授、現在は名誉教授）に学生時代たくさんの指導を受けて、事実上の学問の師であった関係から、掲載をお願いしたものであった。

この論文が「古代文化」に掲載されたのは、原稿を送ってから1年余たった昭和51（1976）年2月と3月であった

〔「古代文化」第28巻2号・3号、大部な論文であったため、上下に分けて掲載〕。遅れた理由は、今でいう査読によって渡辺先生が掲載に躊躇したことにもあったが、その前に、同様なテーマを扱った村田文夫さん（川崎市教育委員会、現在は退職）が「柄鏡形住居址考」という論文をまとめていて、それが、私の論文が掲載される前の昭和50（1975）年11月号（「古代文化」第27巻11号）に掲載されたことにもよったものと思われる。

この私の初めての掲載論文の末尾に渡辺先生がこの論文に対するコメントを掲載しており、論文としては珍しいコメント付きのものとなっているのも懐かしい思い出である。それとは別に、この村田さんと私のほぼ同時期に発表された論文は、後に今日まで続く論争の出発点ともなった。すなわち、柄鏡形住居址や敷石住居址の性格を特殊なものとする村田さんの考え方と、一般的な住居構造と認識する私の立場が相対立することになったのである。一つの論文、それも処女論文が学界の論争となり、今日まで引用され続けていることを、自分としては、今も誇りに思っている。研究は、誰に強制されるものでもなく、自由かつ斬新な発想力が必要であることをつくづく思う。なお、敷石住居址の研究は、その後も研究を重ねて、平成13（2001）年、早稲田大学へ提出した博士論文として結実することになる。

そうした個人研究とは別に、神奈川考古同人会に集う縄文時代研究者たちが中心となって二つの大きなシンポジウムを開催した。昭和55（1980）年12月には、「シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題」を、昭和58（1983）年12月には、「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」を各地の研究者に呼びかけて開催し、それにあわせて大部な資料集を作成した。現在各地で開かれている、縄文時代に関するシンポジウムの先駆けともなったもので大きな反響を得るとともに、研究の進展に大いに寄与したものと自負している。

神奈川県職員から昭和女子大学教員へ

その後、毎年論文を発表し続けた。テーマは縄文時代中期から後期にかけてさまざまな問題を取り扱ったものであった。そうした中で、平成元（1989）年には、縄文時代を研究する全国の研究者に呼びかけて、「縄文時代文化研究会」を立ち上げて、毎年、機関誌「縄文時代」を刊行し続け、今年5月には24号を数えるに至っている。時代を限

った全国的な研究組織としては、初めてのものであり、現在は会員が200名を超える組織となっている。

また、敷石住居址の研究をまとめあげ、平成13（2001）年11月早稲田大学に提出した学位請求論文「敷石住居址の研究」により、博士（文学）の学位が授与された。この他、神奈川県職員に勤務していた平成2（1990）年4月から平成10（1998）年3月までの8年間、母校の早稲田大学第一文学部で非常勤講師として、講義・実習授業を受けもち、平成13（2001）年には、昭和女子大学日本文化史学科の非常勤講師を務め、これまで研究を重ねてきた考古学、とくに縄文時代文化に関する講義を担当することができた。

いつしか、齢を重ね54歳となり、神奈川県での公務員生活も29年目を迎えるようになり、文化財保護課の課長代理を兼ねながら、県出資の財団法人かながわ考古学財団の調査研究部長として派遣されて、神奈川県内の遺跡調査の指導的な役割を努めるようとなっていた。そんなときの平成13（2001）年、恩師の櫻井清彦先生の退職に伴い、その後任として昭和女子大学の教員へのお誘いが舞い込んだのである。このまま県職員として定年までの5年間を全うするか少し悩んだが、研究の継続を考えて、この申し出を受けて翌年4月より、昭和女子大学大学院生活機構研究科教授（学部は日本文化史学科、現在は歴史文化学科）として再スタートを切ることとなった。

大学に移った平成14（2002）年10月、博士論文を骨子として、六一書房より『敷石住居址の研究』を刊行することができた。約400頁の大部なもので、これまで取り組んできた敷石住居址、私が提唱している「柄鏡形（敷石）住居址」研究の集大成ともいえるものと今でも自負している。この著作が刊行された翌年の平成15（2003）年10月、長野県茅野市が制定した「尖石縄文文化賞」第4回の受賞者に選ばれたことも望外の喜びであった。この賞は、長野県尖石遺跡の調査に尽力された故・宮坂英弼先生の業績を記念して長野県茅野市が制定したもので、毎年縄文時代の研究に優れた業績をあげた研究者に与えられるものであり、長年取り組んできた敷石住居址の研究などが評価されたものであった。実は、この賞の第1回の受賞者が、私もその立ち上げに関係した「縄文時代文化研究会」であった関係上、個人で受賞できるとは思っていなかったもので、その喜びも一入であった。

昭和女子大学へ移ってから、教育と研究を車の両輪と

してこれまで尽力してきたが、研究面では、敷石住居址の研究をさらに発展させるため、平成 19-21 年度に科学研究費基盤研究 (C) に研究課題「縄文時代における柄鏡形 (敷石) 住居址の研究」を申請したところ採択され、3 年かけて研究を継続した。その成果を中心として、先に刊行した『敷石住居址の研究』のいわば続編という形で『柄鏡形 (敷石) 住居と縄文社会』を六一書房より刊行した。科研費の取り組みは、その後、平成 23-25 年科学研究費基盤研究 (C) として「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」が採択され、現在は研究の最終年度にあたり、その研究成果を公開すべく準備中である。この研究は、縄文時代の変遷過程の中で、中期から後期へと劇的に変化する歴史的意味を明らかにすることを目的としており、これまでの継続的な研究の総まとめと位置づけている。

また、そうした研究と関連しつつ、同時に大学における考古学教育の実践の場を学生たちに提供することを目的として、平成 17 (2005) 年から山梨県北杜市明野町 (旧・明野村) 所在の縄文時代中期環状集落址の発掘調査を現在まで実施してきた。8 月の夏季休暇を利用して約 2 週間実施しているもので、平成 17・18 (2005・06) 年は北杜市教育委員会が実施していた明野町梅之木遺跡の調査に参加し、平成 19 (2007) 年からは、北杜市教育委員会の紹介により明野町諏訪原遺跡の発掘調査を実施している。毎年、30 名ほどの大学院生・学部生が参加しており、引率として、私のほか、歴史文化学科の小泉玲子先生が当たっている。とくに、今年度から、この遺跡発掘調査実習を単位化することとなり、多くの大学院生・学部生が参加した。初めは、すべて女子学生なので、夏の炎天下での発掘調査は体力的に無理かと心配していたが、今時の「女子力」はなかなかたいしたもの、何人かは熱中症になり休む学生も出るものの、そうした心配は杞憂であり、すこぶる順調に発掘調査を行うことができている。昭和女子大学の学生たちの真摯な取り組みに敬意を表したい。

研究の視点と方法

とりとめもなく、これまでの研究の歩みについて触れてきた。自分の研究を自分が評価すると、どういうことになるかということ、手前味噌であるけれど、山本暉久の考古学はきわめて実証性に裏付けられたものであることがいえよ

う。どういうことかということ、論文をまとめるさい、徹底的に関連する資料 (考古学では、関連する遺構・遺物) を収集するというを必ず行うということである。実は、この作業はきわめて根気のいるもので、各地から発見されている類似資料にたえず目配りをする必要があるということである。よく大学院生の修論を指導する場合、まずよく対象とする資料を実地に見ること、これまでの先行研究ではなにが問題となっているかを把握すること、そして、関連する資料を収集すること、それも 100 パーセント集めることは不可能にせよ、最低 8 割くらいは集めること、そうすれば、その結論が見えてくると、よく話している。やはりはじめに「データありき」なのである。だから、なにか論文をまとめるとき、関連資料を集めていくとおのずと考えがまとまってくるのである。

それと、テーマは一つまとめると、それに派生するさまざまなテーマが生まれてくるから、「継続もまた力なり」なのである。大学院を終えて就職して今日まで、その繰り返し論文として結実してきたように思う。自分自身を思うと、あまり器用ではないから、縄文時代以外の時代を扱った論文はほとんどない。縄文時代一色であり、しかも、あまり縄文土器そのものの、型式変化や編年には興味がなく、縄文時代の歴史的な変遷過程や宗教構造・社会組織などに興味が惹かれてきた。だが、遺跡の調査からは、そのような目に見えない事柄を追求することは大変難しいことだと思う。逆にだからこそ、追求しがいの面白いテーマであるとも思っている。

おわりに

半世紀近くにわたる、自分の研究の歩みを振り返ってきた。遅々とした歩みではあったにせよ、諦めずに続けてきたことにより今日があるのではないかと思っている。しかし、それは自分一人だけで成し遂げられるものでもない。これまで、私を導いてくれた、先生方や先輩方、同僚、よき研究仲間、それと、良き教え子たちに恵まれたからこそ、現在の自分があると思っている。そうした多くの方たちに感謝申し上げたい。

これからも、ますます研究を重ねて行きたいと思う。

(やまもと てるひさ 歴史文化学科)